

# 先生、ありがとうございました —姜在彦先生とむくげの会—

飛田雄一『むくげ通信』285号、2017.11.26



2014.11.8 姜在彦先生、右は奥様の竹中恵美子先生

姜在彦先生が11月19日に亡くなられました。91歳でした。本当に残念です。先生は、私たち若者(当時)にいつも優しく、励ましてくださいました。むくげの会が10周年記念論文集として『朝鮮一九三〇年代研究』(三一書房、1982年10月、3800円+税)を出版したときも次のような序文を寄せてくださいました。

「学問というものは、アカデミズムが独占しなければならぬほど、けっして神秘的なものではない。一〇余年にわたる「むくげの会」の歩みを総括した成果としての本論文は、なによりもそのことをみごとに実証してみせた。朝鮮史研究の貴重な成果の一つが、市民運動のなかで生産されたことの意味を思い、かつそれをよろこび、ここにとりとめない序文を寄せるしだいである。」

身に余るお言葉で、私たちは舞い上がったような気分になったことを思い出します。

先生と私たちが最初にお会いしたのは1970年秋か71年初めのことだと思います。大阪旭屋書店の喫茶室でお目にかかりました。佐久間英明さん、堀内稔さんと私が待っていると先生が入ってこられました。実はもっとお年寄りの先生を想像していたので、若い先生にびっくりしたことを覚えています。1971年2月28日にむくげの会が開催した「3.1 独立運動52周年集会」(県民会館)での講演をお願いしたかったのです。先生は快くお引き受けくださいました。テーマは「歴史から見た朝鮮と日本」。講演録は、『無窮花通信』4号(1971.3.30、5号(1971.4.13)まで通信名は漢字)に掲載されています。

先生には、1973年3月4日にも(神戸学生青年センター)お話ししていただいています。テーマは、「朝鮮の思想を考えるにあたって」でした。通信18号(1973.5.6)に掲載された先生の講演録のまえが

きは次のようになっています。

「今年の3.1集会は、過去2回のともすれば受け身におわってしまいがちは講演形式とは異なり、『近代朝鮮の思想』(紀伊国屋新書)をテキストに選び一応の予備知識があるという前提の下に、この本の著者姜在彦氏にこの本を理解する上に必要なことがらをお話しました。」

案内の文章には、「参加する方は、テキストを読み、持ってきて下さい」とあります。当時の私たちはすごく勉強家だったようです。

同号掲載の11頁半の講演録(B5版、2段組、ガリ版)は、「以下の内容は当日のテープをもとにムクゲの会の責任で編集したものです」となっていますが、先生は、講演録はいつもおまかせしますということでそのまま掲載したように思います。むくげの会の編集能力を信用していただいていたようです。



先生はその後も学生センターの朝鮮史セミナーで何回も講演していただいているので、私たちむくげの会のメンバーは「おっかけ」的にそのセミナーに参加していました。セミナーは韓哲曦さん(青丘文庫)の『朝鮮・自由のための闘い』の出版記念会を契機に始まったものですが、姜在彦先生は講師のなかでも最多出演ではなかったかと思います。

1973.6.23、「「敗戦」と「解放」の意味」、1974.6.22「在日朝鮮人形成の歴史」、1975.6.21「朝鮮の歳時風俗」、11.15「江華島事件前後」、1977.4.29、朝鮮史セミナー5周年シンポジウム「朝鮮史をどう学ぶか」(李進熙、中塚明氏と)、そして同年(1977)5月から「わたしの朝鮮史一通史と史話」と題するシリーズで、1978.7.23まで計13回の講演会が開かれました。たしか5周年シンポジウムのときだったと思いますが、先生が来られないのでご自宅に電話をしました。先生が直接でられて「夜じゃなかったの・・・」というお返事で困ってしまいました。が、シンポジウムの途中に駆けつけてくださり無事終了したことを覚えています。

その後も何回か朝鮮史セミナーで講演していただいています。以下、記録として書いておくことにします。

1978.7.29-30「近代における日本と朝鮮—朝鮮民衆の闘いの歴史」(夏季特別講座)、1979.4.15、映画と講演「朝鮮通信使の歴史的意義」、同年5.25、6.16、7.21、「李朝時代の思想」(全3回)、1980.4.19「朝鮮近代学生運動史」、1982.9.18「総論・朝鮮の民族運動」、1984.4.21、5.26、6.23、「近代朝鮮の思想」(全3回)、1986.5.24「民戦時代の私」、6.28、「路線転換と総連の結成」(このふたつは『体験で語

る在日朝鮮人運動』センター出版部、1989.10、に収録)、1988.11.19、「李三平、ジュリア・おたあ、姜沆一秀吉に連れてこられた人々」、1999.11.6、「朝鮮独立運動における光州学生運動」(水野直樹さんも講演)、2007.6.1、青丘文庫設立 35 周年／神戸市立中央図書館移転 10 周年＜記念講演会＞(共催、会場、青丘文庫、「朝鮮史研究と青丘文庫－韓哲曦さんと青丘文庫設立のころ」(水野直樹さんも講演)、2009.3.6、「日本と朝鮮、100 年の歴史をふりかえる－3・1 独立運動 90 周年を迎えて－」(共催、青丘文庫研究会・コリアンマイノリティ研究会)、2010.10.29「朝鮮半島の分断と私の家族」(朝日新聞 2010.6.30「60 年会えないのか、3 カ国兄弟生き別れ」参照)

この新聞記事によると、朝鮮戦争が始まった 1950 年 5 月、韓国忠清道清州で教師をされていた先生は、5 歳年下の末弟・在倫さんを故郷の済州島に帰しましたが、弟・在奎さんとは連絡がとれなくなります。その後日本に逃れた先生のもとに 1960 年北朝鮮から手紙が届きます。在倫さんは韓国で軍隊に入りのち陸軍士官学校で教鞭をとるようになりますが先生の日本での活動が問題視され圧力を加えられたというのです。

●

むくげの会は現在月 2 回の学習会を開いています(1995 年阪神淡路大震災まではなんと週 1 回)。他に 2 か月に一度のグルメの会と通信発行がありますから月 3 回も顔をあわせていることになります。そのグルメの会が大阪の韓国料理屋で開かれるときには先生をお招きします(割勘ですが・・)。2000.1.18 アリラン食堂、2012.11.25 新京愛館、2014.3.29、ウリチプ(我が家、いずれも鶴橋)のときにご参加くださいました。以前の先生の飲みっぷりに比べるとだいぶ弱くなりましたが、ワイワイと楽しく歓談させていただいたことを思い出します。

先生の健康のために始められた「歴史の接点を歩く会」というのがあり、金英達さんが世話をされていました。その 11 回目の例会(1998.3.22)は私が案内人になって神戸の外国人墓地を訪ねました。(『むくげ通信』167 号、1998.3.29 参照)墓地には朝鮮にゆかりのあるふたりの宣教師、W. B. スクラントンと L. L. ヤングが眠っているのです。往路は急坂なのでタクシーに分乗し、そして少しだけ歩いて外国人墓地を訪ねました。この墓地は私が子どものころが自由に入ることができましたが、現在はお参りの場合に限られます。私たちはそのふたりのお参りをして、隣接の修法が原でお弁当を食べました。少々(?)酔っ払いながら大龍寺、布引の滝を通過して新神戸駅まで無事おりました。今も忘れられない楽しい思い出です。

先生が青丘文庫研究会、朝鮮史セミナーなどで神戸にこられたときは、懇親会のさらにあとにカラオケに行くこともありました。今のようなカラオケで

はなくスナックで歌うカラオケです。先生の「十八番」というより、私はそれ以外の歌を聞いたことがありませんが、その歌は美空ひばりの「悲しい酒」です。先生の歌は哀愁がこもっていますが、テンポがまるでありません。先生の歌がスローテンポなのです。それで私が途中で伴奏を切ることがよくありました。

●

むくげの会は 30 周年記念論文集『新コリア百科－歴史・社会・経済・文化』(明石書店、2001.2.20、4600 円+税)を出版しましたが、そのときにも先生に序文をお願いしました。私は講演、原稿などをお願いをよくして先生を煩わせましたが、断られた記憶がありません。ほんとうに感謝しています。

「三〇周年記念論文集に寄せて一序」に次のように書いてくださっています。

「記憶をたどり寄せると、むくげの会とのさいしょの出会い、一九七一年三・一集会での講演らしいのですが、いまでも会の中心メンバーとして居つづけている皆さんは、確か二〇代前半の、ベ平連運動で走り回っていた学生たちであったように記憶しています。当時の私はというと、すでに四〇代半ばで、どこにも属していない、というよりははじき出された一匹狼でした。／／それから三〇年間のつきあいになるのでしょうか。会員のオールドメンバーも、今ではそれぞれの分野の達人として、頭にチラホラ白いものが混じるほどの「老練」の域に達しています。そういうみなさんの貫禄に接するたびに、今昔の感を禁じえません。」

「普通「記念論文集」というと、襟を正して読まなければならない内容を予想します。ところがこのたびのむくげの会記念論文集の目次を見ると、その内容が極めて多様であり、身近であり、かつ雑学的であることで、断然異彩を放っています。／考古学や歴史の話がでたと思ったら、サツマイモやジャガイモの話が出たり、プロ野球の話が出たりして変幻自在、まことにバラエティに富んだ内容になっていて、むくげの会の「学風」をストレートに反映した好ましい論文集になっています。／二一世紀への劈頭に立って、むくげの会の本領である運動、学習、出版、この三位一体の活動が、ますます磨きをかけられ、輝きを増すであろうことを確信しながら擱筆します。」

心のこもった文章を改めて読んでいたら長々と引用してしまいました。ほんとに優しい文章だと思います。

「達人」はいかにも恥ずかしいですし、むくげの会が「輝き」を増しているとは思えませんが、先生が私たちにくださった多くのことを心に刻みながら、これからも歩んでいきたいと思います。先生、どうか心安らかにお休みください。ありがとうございました。